

Title	語彙論的統語論
Author(s)	仁田, 義雄
Citation	大阪大学, 1991, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37853
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【 4 】

氏名・(本籍)	仁	田	義	雄
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	9794	号	
学位授与の日付	平成3年5月21日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文名	語彙論的統語論			
論文審査委員	(主査)			
	教授	徳川	宗賢	
	(副査)			
	教授	前田	富祺	助教 真田 信治

論文内容の要旨

本論文は、まず、語彙論的統語論と論者の名づける新しい文法分析・文法記述の基本姿勢、方法論を提示し、ついで、その有用性を検証したものである。論者の言う語彙論的統語論とは、きめの細かい説明能力に富んだしかも明示的な文法分析・記述の一方法である。また、この語彙論的統語論は、語の意味論的－語彙論的分析・記述の客観化にも有用性を発揮する。

本論文の内容構成は、「Lexico-Syntax への誘い」「表現形式と意味解釈」「きめの細かい文法記述をめざして」「語彙論・意味論への貢献」と題された四章から成り立っている。

第一章「Lexico-Syntax への誘い」は、「Lexico-Syntax への誘い」「結合価文法素描」「文の表現類型」の三節から成る。「Lexico-Syntax への誘い」では、語義とその語の示す文法的な振舞い方とは、従来考えられていたほど無縁な存在ではないこと、語が一定の文法的な振舞い方をする基因が、当の語の語義のあり方にあること、したがって、文法記述をより包括的によりきめ細かくより明示的に行うためには、語義にも十分注意を払う必要のあることなどを、述べている。これが、論者の語彙論的統語論の基本姿勢である。「結合価文法素描」では、深層格や動詞の結合価や依存関係図などを用いて、語彙論的統語論の立場から、結合価文法といった新しい生成的な文法記述のモデルを説明している。「文の表現類型」では、文の構造と機能との相関を捉えながら、モダリティから見た文のタイプとしての表出型、訴え型、演述型の三型を設定したもの。また、この文のタイプが、ガ格の人称や文末の文法カテゴリーの現れ方を規定することを明らかにしている。

第二章「表現形式と意味解釈」は、「格と係助詞・副助詞」「自然らしさの法則」「連体結合の連語とその意味解釈」「名詞文のシンタクスと意味解釈」の四節から成る。「格と係助詞・副助詞」では、三上章の言う「ハ」の兼務がなぜそのように行われるのかの問題について、論者の提唱する語彙論的統語論の重要な道具立てである格支配と意味論的選択制限の視点から、理論的に考察している。「自

然らしさの法則」では、文の意味を解釈する際に、語義が、いかに重要な働きを果たしているかを、明らかにしている。「連体結合の連語とその意味解釈」は、動詞の格支配といった現象をも利用しながら、連語の構造原理やその意味解釈の際に働くメカニズムを明示化しようとしている。「名詞文のシンタクスと意味解釈」では、名詞の語義のあり方に注意を払いながら、名詞文を帰属型と等価型に分け、従来論争の多かった「僕はうなぎだ」式の文についても、その構造原理と意味解釈のあり方について、一つの解答を提出している。

第三章「きめの細かい文法記述をめざして」は、「引用文をめぐる二三の考察」「対称動詞と半対称動詞と非対称動詞」「カラ」を含む連用結合の連語」「多イ」「少ナイ」の装定用法」の四節から成る。「引用文をめぐる二三の考察」では、従来さほど明確にされることになかった日本語の間接引用と直接引用の特徴を考察し、外的な言語活動に関わる引用動詞と内的な思考活動に関わる引用動詞を区別し、引用動詞の違いによる引用内容のタイプへの制約を明らかにしている。「対称動詞と半対称動詞と非対称動詞」では、動詞の表す動きをめぐる主体と対象との関係性の一つである対称性といったものを明らかにし、それに応じて、動詞が、「AがB {ト/*ニ} 戦ウ」のような対称動詞、「AがB {ト/ニ} 会ウ」のような半対称動詞、「AがB {*ト/ニ} ヤル」のような非対称動詞に分かたれること、また、「太郎が花子ト会ッタ」と言うが、「太郎が事故 {*ト/ニ} 会ッタ」と言わない理由などについても考察する。「カラ」を含む連用結合の連語」では、動詞の格支配や「カラ」の意義などの視点から、「Nカラ+用言」といった連語の成立条件を明らかにしている。「多イ」「少ナイ」の装定用法」では、「美シイ人が歩イテ来タ」とは言うが、「*多イ人が庭ニ集マッテイル」とは言えず、「多クノ人が庭ニ集マッテイル」と言わなければならない理由、および、「白髪ノ多イ人が歩イテ来タ」になれば可能になる理由について、名詞を修飾するといったことがどういう機能であるのか、属性規定とはどういった現象なのであるか、といったことと共に考察している。

以上三章では、語彙論的・意味論的な現象への配慮が、いかに文法分析・文法記述を、きめの細かい明示的なものにするかについて、明らかにした。これらに続く第四章では、語彙論的統語論といった分析方法・分析姿勢が、語彙論・意味論の領域でいかに有用であるかを検証した。

第四章「語彙論・意味論への貢献」は、「類義語の明示的記述をめざして」「用言の多義性への考察」「動詞の辞書記述への試み」「語構成と文法記述」の四節から成る。「類義語の明示的記述をめざして」では、従来辞書では言い換え的に同じように記述されている「取り返ス」と「取り戻ス」について、入れ換え可能な場合もあるが、「彼女ハ意識ヲ取り戻シタ」とは言うが、「*彼女ハ意識ヲ取り返シタ」とは言わないことを、ヲ格に来る名詞が、ガ格で示される者から分離不可能である、といったことで、説明している。これは、明示的な動詞の文法的な振舞いの違いを用いて、なかなか捉えがたい語の意味論的な異なりを客観化しようとするものである。「用言の多義性への考察」も、基本的に同じ姿勢で貫かれている。ただ、二語の類義性の客観化ではなく、一語として取り扱われている語の有している多義性の客観化をめざすものである。たとえば、[音の聴取][質問]といった「聞く」の有している多義性のブランチが、「太郎が物音ヲ聞イタ」と「太郎が答ヲ友達ニ聞イタ」のように、[ガ, ヲ]といった格の組み合わせを取るのか、[ガ, ヲ, ニ]といった格の組み合わせを取るのかといったこ

とによって、明示的に把握できること、[物の授受][物の移動]といった「上ゲル」の意味のブランチが、「太郎が彼女ニ本ヲ上ゲタ」「太郎が棚ノ上ニ本ヲ上ゲタ」のように、ニ格の名詞の意味素性の異なりによって、客観的に捉えうることを示したものである。「動詞の辞書記述への試み」では、文法記述に有用な辞書記述のあるべき姿を模索している。そして、そのような辞書記述が最低限有していなければならない情報として、動詞の格体制や、格成分として共起する名詞に対する意味論的選択制限や、他の共起成分への制限を挙げている。「語構成と文法記述」では、語構成論と統語論を有機的に結びつける試みとして、漢語動詞を取り挙げ、動詞の語構成のあり方が、その動詞の有する文法的な振舞い方に影響を与えることを、語構成の幾つかのタイプを取り出しながら明らかにしている。

本書で扱ったこれらの諸問題は、いずれも、論者の語彙論的統語論といった分析方法・分析姿勢によって、はじめて極めて有効な形で分析・記述されうようになったものである。なお、『語彙論的統語論からした日本語文法研究』と題する参考論文には、「語彙と文法」「格体制と動詞のタイプ」「結果の副詞とその周辺」「再帰動詞・再帰用法」「動詞の意味と構文」「動詞とアスペクト」「意志動詞と無意志動詞」「動詞の文法的諸側面の相互交渉」「拡大語彙論的統語論」といった諸論文が収録されている。これらは、いずれも『語彙論的統語論』出版以後に書かれたものであり、語彙論的統語論といった分析方法・基本姿勢から出発する具体的かつ体系的な試みであり、この分析方法・基本的姿勢が、特に動詞文の分析・記述にとって、極めて有用な方法であることを実証している。

本文347頁(1頁35×28)、400字詰原稿用紙換算約850枚発行出版社・明治書院

論文審査の結果の要旨

本論文は、文法分析・文法記述の新しい方法論を提示しようとした論考である。評価すべき最大の点も、新しい方法論を積極的に推し進めようとしたところにある。本論文が刊行された当時においては、日本語文法研究の世界では、散発的な試みがなかったとはいえないものの、文法分析・文法記述に意味を持ち込むことは、ほとんどなかった。さらに言えば、文法分析・文法記述に意味を持ち込むべきではないという考え方が主流であった。そういった状況下であって、本論文は、自らの研究方法に、「語彙論的統語論」といった名称を与え、語の有している範疇的な語義のあり方が、その語の文法的な振舞い方・文法機能に重大な影響を与え、その基本的なあり方を決めてかかるといったことを、それにふさわしい様々な言語事実を掘り起こしながら証明している。文が、語から形成されているという事実を考えれば、語の有している文法的な振舞い方を、予じめ十分明らかにしておくといったことは、文形成や文の意味解釈を明示的に説明することを可能にする。また、こういった方法論は、文法分析・記述の任務である文形成や文の意味解釈の行われ方に対する分析・記述を、きめ細かく行わせることを可能にしている。従来、日本語文法研究の世界では、骨組みの記述に留どまり、少数の例外的研究を除いて、やはり、こういったきめの細かい分析・記述は、希なことであった。

本論文の第四章が明らかにしているように、こういった語彙論的統語論といった分析・記述の方法

は、統語論の領域だけでなく、また、逆に語彙論や語の意味分析といった領域にも、新しい方法論を提供することになる。形式的に捕捉可能な語の文法的な振舞い方の違いを重視することで、従来さほど分明に行われることの少なかったこれらの領域に対して、明示的・客観的な分析・記述の可能性の端緒を拓いた。また、本論文で示された方法論は、辞書の製作にも新しい変化をもたらした。事実、それまで日本にはなかった新しい試みの辞典である『日本語基本動詞用法辞典』（1989年刊行、大修館書店）が、論者を実質的に中心とするグループによって製作されている。

また、本論文には、外に、第一章第三節「文の表現類型」に述べられているような、文の構造分析に対する機能論的観点からの貢献も存する。言語を伝達の道具として捉え、言語の構造は、言語の機能に深く関わるという基本姿勢のもとに、文末の文法カテゴリの現れ方と主格の人称との相関が、きれいに取り出されている。従来ほとんど取り挙げられることのなかった人称への機能論的な観点からの本格的な考察である。この種の研究は、後に『日本語のモダリティと人称』（1991年刊行、ひつじ書房）として結実する。

新しい方法論を意欲的に提示しようとした本論文ではあるが、研究の常として、本論文にも、当然、問題になるべき点や未熟な点、また不十分さが幾つか存在する。最大のものは、方法論の提示を目的としているため、日本語文法の分析・記述として、十分には体系的なものになっていないという点である。方法論提示の書といえども、体系的であるべき文法研究においては、やはり、これはいずれ克服されるべき点であろう。ただ、語彙論的統語論からした日本語文法の体系的な分析・記述については、論者も既にそれを目ざしており、参考論文として付されたものが、既にかかなりの程度にそれに応えている。

また、論者も述べているように、日本語文法研究の中には、語彙論的統語論といった方法論が余り有効でない領域も存在し、これらをいかに処理していくかは、論者の今後の課題である。また本論文が含んでいる語彙論的統語論と文の機能的分析は、直線的に結び付くものではなく、これら両者をいかに統合して、日本語文法全体のより充実な包括的な分析・記述を行うかは、論者が今後生涯かけて取り組むべき課題であろう。

こういった克服すべき点を持っているにも拘わらず、本論文で論者が展開した語彙論的統語論といった方法は、その後の日本語文法研究の世界で、かなり大きな影響を与え、この種の方法論の有効性は既に常識化した感がある。また、近年、語彙論的統語論といった名称も、論者一人の研究姿勢を表す言葉ではなく、普通名詞化するようになってきている。さらに、本論文は、比較的長いスパンでの研究史の中に既に位置付けられるようになってきている。以上述べてきたように、本論文は、日本の文法研究を推進させる上で注目すべき貢献をなしたものであることは明らかであり、新しい方法論を唱道し定着させた論考として、文学博士（論文）の学位申請論文として、十分価値を有するものと認定する。